特集

競合する既成政党と新党―政党は生き残れるか

はじめに

高安　健将　早稲田大学教育・総合科学学術院教授

日本の政党助成法は、その第１条で、「議会制民主政治における政党の機能の重要性にかんがみ、国が政党に対し政党交付金による助成を行う」と定めている。政党は税金を原資とする公金を投入してでも助成し支えるに値するということであり、「議会制民主政治における政党の機能」こそは重要であると謳われている。

しかし、今日、各国で既成政党に対する不満が渦巻いている。既成政党の一部は、各国で民意という土台から遊離し、民意とのつながりを失いかけているように見える。自らが政党によって代表されているというよりも、政党にはむしろ疎外されていると感じる有権者も多い。

＊

従来より、政党システムを市場になぞらえる見方がある。その見方に従えば、供給側である既成政党が需要側である有権者の求めるものを提供できないならば、新しい供給の主体である新党が登場してくれるとも予想される。もちろん、新規参入は経済における実際の市場であっても容易ではない。政治制度や選挙制度、雇用制度なども新規参入を難しくする。これに対し、新規参入をしやすくすることで、供給側の既成政党には刺激となり、需要側の有権者は求めているものを得られるはずである。

しかし、本当にそのようになっているのだろうか。役割を終えた政党は退場するのだろうか。有権者が求めるような代表や指導者、国のかたち、そして政策

たかやす　けんすけ

1971 年東京都生まれ。1994 年早稲田大学政治経済学部卒業、2003 年ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) にて Ph.D.(Government) を取得。専門は、比較政治学。成蹊大学法学部教授、同大学アジア太平洋研究センター所長等を経て、2023 年より現職。成蹊大学名誉教授。
著書に『首相の権力―日英比較からみる政権党とのダイナミズム』（創文社、2009 年）、『議院内閣制―変貌する英国モデル』（中公新書、2018 年）、『教養としての政治学入門』（共著、ちくま新書、2019 年）など。

を提供する新党は登場しているのだろうか。既成政党は人びとの声を吸い上げることに苦心しているが、支持を増やしている新党は既成政党に代わってこれに成功しているのだろうか。

＊

既成政党は、選択肢を提示すると同時に有権者の選択肢を制限してきた面がある。それが批判を受けるもととともなってきた。たとえば、英国では、グローバル化、欧州連合、産業主義、金融優先、難民の受け入れ、死刑制度などについては、政党エリートの間にある種の合意があり、有権者に対し「異なる道」は示されてこなかった。良くも悪く、新党の台頭は、封じられてきた争点を顕在化させる。

ただし、一部の新党は、耳目をひく突飛な主張をしたり、「エリート」や移民、難民、他国を攻撃することで、有権者の声を代弁していると主張する。さらに深刻なのは、一部の政党が多元的価値を否定し、一部の人びとがこれに喝采を送り、自分たちだけが民意を体現していると主張するその姿勢である。それは結果的に、民意を表出する新たなルート・主体というよりも、行き場のない民意を利用して、自らの主張や世界観、自らの利益を追求する主体に過ぎない危険がある。デモクラシーの補完あるいは新しい担い手というよりも、デモクラシーを空洞化させ、実質的に破壊する行為である。

森論文は、「民主主義の根幹にあるべき共通の大義を破壊するもの」に警鐘を鳴らす。実際、「非自由主義的な政治」は新党からだけではなく、既成政党のなかからも台頭しうる。

既成政党であれ、新党であれ、現代社会にある複雑な対立や諸課題に対し、魔法の杖をもってはいない。だからと言って、私たちは、政党の限界に理解を示して、政党がいてくれるだけで有り難い、私たちの社会にとって不可欠な存在であると考えることはできない。くじ引きでランダムに議員を決めることは、まだまだ現実的ではないとみなされている。だが、政党政治が積極的な存在価値を示すことができなければ、くじ引きによる議員選出に取って代わられても、まだましという状況にさえなりかねない。こうした危機的状況をどうにか回避するためにも、新党の活力を社会の活力として昇華し、既成政党に自己刷新を促すことで、政党政治をバージョンアップすることが求められている。

＊

今回の特集では、日本の他に、オランダ、ドイツ、英国、フランスを取り上げる。オランダは、水島論文でも新党の「見本市」と表現されるほどに新党が多数登場しており、比例代表制という選挙制度がこれを促している。これに対し、ドイツは、小選挙区比例代表併用制という比例代表を根幹とする選挙制度を採用しつつも、安井論文が指摘するように、「自由で民主的な基本秩序」に敵対する勢力を警戒し、新党の台頭を制度的には抑制してきた。英国は、若松論文に示されるように、より直截に小選挙区制によって新

党のみならず中小政党の台頭を抑えてきた。そしてフランスでは、吉田論文によれば、半大統領制という政治制度のもとで「政党はそもそも主要なアクターであることを期待されない存在」であったという。制度や歴史的展開の異なる、こうした国々のいずれにおいても、既成政党は新党からの挑戦を受け、新党の動向に影響を受けざるを得ない。

＊

既成政党と新党に関わる関心は多岐にわたる。既成政党の何が問題なのか、新党の何が人びとを惹きつけているのか、新党は政党システムを刷新して民意のよりよい表出に貢献しているのか、多元的価値を否定する一部の政党は政治システム自体にとって危険な存在なのか、新党は代表制の一翼を安定的に担う存在となりうるのか、既成政党の役割は今後どうなるのか、私たちの政治社会はどのように新党を包摂すればよいのか。今回の特集では、各国の政治に精通する代表的な研究者に執筆を依頼し、快くお引き受けを頂いた。感謝を申し上げたい。本特集が、既成政党と新党そして政党政治そのものについて考える一つのきっかけになれば幸いである。■